

**第3期横浜市子ども・子育て支援事業計画策定支援業務委託
青少年の地域活動拠点づくり事業利用者 ヒアリング調査
社会的養護経験者 ヒアリング調査
報告書**

令和6年 3月

横浜市

目次

第1部 青少年の地域活動拠点づくり事業利用者 ヒアリング調査	1
1 調査の趣旨	2
2 調査の概要	3
3 調査結果	4
(1) 青少年交流・活動支援スペースさくらリビング（中区）	4
(ア) 利用時間や曜日について	4
(イ) さくらリビングの施設・部屋・設備について	4
(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて	4
(エ) まだ来たことがない人に、来てもらうには	5
(オ) まだ知らない人に、知ってもらうには	6
(2) あおばコミュニティテラス（青葉区）	7
(ア) 自分が居心地がよいと思う場所	7
(イ) 人を集めるための共通点（雰囲気・場・時）	7
(ウ) ある場所に初めて行くきっかけ、行き続ける理由	7
(エ) 幅広い世代の方への広報の方法	8
(オ) あおばコミュニティテラスがもっと様々な世代の人に来てもらうには	8
(3) M-base（南区）	9
(ア) 利用時間や曜日について	9
(イ) M-base の施設・部屋・設備について	9
(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて	9
(エ) まだ来たことがない人に、来てもらうには	10
(オ) 青年館活用のアイデア（横浜青年館の活用方法を自由に設計できるとしたら）	11
4 調査結果のまとめ	12
(1) 青少年交流・活動支援スペースさくらリビング（中区）	12
(ア) 利用時間や曜日について	12
(イ) 施設、部屋、設備について	12
(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて	12
(エ) 利用してよかったこと	12
(オ) ICT 活用、広報について	12
(2) あおばコミュニティテラス（青葉区）	13
(ア) 利用時間や曜日について	13
(イ) 施設、部屋、設備について	13
(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて	13
(エ) ICT 活用、広報について	13

(3) M-base (南区)	14
(ア) 利用時間や曜日について	14
(イ) 施設、部屋、設備について	14
(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて	14
(エ) 利用してよかったこと	14
(オ) ICT 活用、広報について	14
(カ) 横浜青年館の活用について	14
(4) 青少年の地域活動拠点づくり事業利用者ヒアリングのまとめ	15
(ア) 利用時間や曜日について	15
(イ) 施設、部屋、設備について	15
(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて	15
(エ) ICT 活用、広報について	15
第2部 社会的養護経験者 ヒアリング調査	17
1 調査の趣旨	18
2 調査の概要	18
(1) ヒアリング対象者	18
(2) ヒアリング日時	18
(3) ヒアリング実施場所	18
(4) ヒアリング実施方法	18
(5) 調査項目	18
3 調査結果	19
(1) 「よこはま Port For」の利用状況等	19
(ア) 「よこはま Port For」を知った経緯・利用し始めたきっかけ	19
(イ) 「よこはま Port For」での過ごし方	20
(ウ) 「よこはま Port For」を利用してよかったこと	21
(エ) 「よこはま Port For」への要望等	22
(2) 社会的養護経験者の困りごとや不安、支援ニーズ等	24
(ア) 社会的擁護下の中高生にとって必要な支援等	24
(イ) 施設等を退所する際に必要な支援等	27
(ウ) 現在の困りごとや不安、及びそれに対する支援等	30
(エ) 困りごとや不安が相談しやすくなるための体制	34
4 調査結果のまとめ	36
(1) 「よこはま Port For」への要望等	36

(ア) 利用してよかったこと.....	36
(イ) 施設・機能等のハード面の充実.....	36
(ウ) イベント等のソフト面の充実.....	36
(2) 社会的養護経験者の困りごとや不安、支援ニーズ等.....	37
(ア) 社会的擁護下の中高生にとって必要な支援等.....	37
(イ) 施設等を退所する際に必要な支援等.....	37
(ウ) 現在の困りごとや不安、及びそれに対する支援等.....	38
(エ) 困りごとや不安が相談しやすくなるための体制.....	38

第1部 青少年の地域活動拠点づくり事業利用者 ヒアリング調査

1 調査の趣旨

令和4年6月に、こども施策を社会全体で総合的かつ強力に推進していくための包括的な基本法として、こども基本法が成立した。同法では、「全てのこどもについて、その年齢及び発達の程度に応じて、自己に直接関係する全ての事項に関して意見を表明する機会及び多様な社会的活動に参画する機会が確保されること。」を基本理念の1つとして掲げており、こどもに関する施策を検討する上で、こども本人の声を聴くことが重要であるとしている。

横浜市では「青少年の地域活動拠点づくり事業」として、中高生世代を中心とした青少年を対象とした居場所を現在市内8か所に設置している。「第3期子ども・子育て支援事業計画」の策定に向けて、社会や時代の変化を捉え、この事業をより効果的に実施するため、現在「青少年の地域活動拠点づくり事業」を利用する青少年に対して、居場所に関するヒアリング調査を行った。

2 調査の概要

以下の3か所の「青少年の地域活動拠点づくり事業」の利用者に対して、ヒアリング調査を実施した¹。

拠点名	青少年交流・活動支援スペース さくらリビング（中区）	あおばコミュニティテラス （青葉区）	M-base（南区）
ヒアリング 日時	2023年8月15日（火） 17:00～18:30	2023年9月9日（土） 17:00～18:30	2023年9月15日（金） 18:00～19:30
ヒアリング 実施場所	青少年交流・活動支援スペース さくらリビング	あおばコミュニティテラス	横浜青年館 演劇練習室
参加者	高校生世代 2人、大学生世代 3人 計 5人	小学生 2人、中学生 2人、 高校生世代 2人、大学生世代 6人 計 12人	現地参加者： 中学生 2人、高校生世代 5人 書面提出者：6人 計 13人
ファシリ テーター	高校生世代の利用者 （意見聴取へも参加）	大学生世代の利用者 （意見聴取への参加はなし）	M-base スタッフ
オブザーバー	横浜市こども青少年局 3人 さくらリビング 2人 株式会社浜銀総合研究所 1人	横浜市こども青少年局 3人 あおばコミュニティテラス 3人 株式会社浜銀総合研究所 1人	横浜市こども青少年局 2人 株式会社浜銀総合研究所 1人
ヒアリング 形式	ファシリテーターを中心に、参加者から以下の項目に沿ってグループヒアリングを実施。	ファシリテーター主導のもと、参加者を6人ずつの2グループに分け、以下の項目に沿ってワークショップを実施。	ファシリテーターを中心に、参加者から以下の項目に沿ってグループヒアリングを実施。 当日出席しなかった方に対して、ヒアリングシートを配布し、後日書面にて回収。
調査項目	<ul style="list-style-type: none"> ・利用時間や曜日について ・施設、部屋、設備について ・活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて ・まだ来たことがない人に、来てもらうには ・まだ知らない人に、知ってもらうには 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が居心地がよいと思う場所 ・人を集めるための共通点 ・ある場所に初めて行くきっかけ、行き続ける理由 ・幅広い世代の方への広報の方法 ・もっと様々な世代の人に来てもらうには 	<ul style="list-style-type: none"> ・利用時間や曜日について ・施設、部屋、設備について ・活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて ・まだ来たことがない人に、来てもらうには ・青年館活用のアイデア

¹ ヒアリング対象者からの発言を促すため、各拠点の利用者のうち、ヒアリング調査のファシリテートが可能な青少年がいる場合は、その方にファシリテーターを依頼した。また、ファシリテーター主導の下、一般的なグループヒアリング形式ではなく、ワークショップ形式で意見聴取を行ったものがある。調査項目は、各拠点の特性や意見聴取の形式等に応じて柔軟に変更できるものとしたため、各拠点における調査項目が若干異なる点に留意が必要である。

3 調査結果

(1) 青少年交流・活動支援スペースさくらリビング（中区）

(ア) 利用時間や曜日について

- ① 利用している時間帯や曜日
 - 青少年委員のボランティアがある日。
 - 大学が休みの日、学校の夏休みや大型連休など。
 - 夕方に不規則の利用。
- ② 開所時間や曜日の要望
 - 特になし。

(イ) さくらリビングの施設・部屋・設備について

- ① 現在の利用方法
 - ボランティアの際に会議室を利用。
 - フリースペースでオンラインゲームや論文検索。
 - 勉強目的で自習室やフリースペースを利用。
 - フリースペースでスタッフや友達と話す。
- ② 施設や設備、利用ルール等についての要望
 - 使っていない会議室をテスト期間に集中して勉強したい方などに開放したらいいのではないか。
 - 部屋の予約を、インターネットを使って利用しやすくしたらいいと思う。
 - 自習スペースは多くの方がいて、狭そうにしている。席を増やしたら快適に過ごせるのではないか。自習スペースの席は、男子が集まりすぎて、女子が入りにくいのではないか。
 - 自習スペースで座れなかったら、職員の人に言えば、空いている場所を使わせてくれることもあるが、認知されていないように思う。

(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて

- ① 過去に参加したプログラムやイベント、ボランティア活動
 - 子どもフェスティバルに参加。さくらリビングにいる中高生や大学生ではなく、幼稚園や小学校低学年くらいの子とのかかわりが新鮮だった。子どもの目線に寄り添って考えることができた。
 - 活動支援スペースでたこ焼きパーティをした。食べ物があることで多くの方が来てくれて、普段話したことがない人とも話せた。
 - さくらビカフェ。カフェで働いている人がさくらリビングに来て、コーヒーを入れてくれる、ということがあった。受付前に紙コップとティーバッグを置いて、自分で作ってください、というのは良かった。
 - 放課後キッズクラブのボランティア。当時、教育系に興味があり、子どもと触れ合う機会があるということで参加。小学生と遊ぶ以外にも、幅広いことをさせていただいた。
- ② イベントや活動の企画に関するアイデア
 - 飲食のイベントをまた開催できたらと思う。

- VRゲームなどに触れる機会があるといいと思う。
- 大学生や小中高生がいるので、勉強会みたいなのがあっても面白いと思う。
- さくらリビング以外の青少年との交流があるといい。徳之島の学生さんとの交流は楽しかった。
- 青少年以外の多くの人と関わる機会があるといい。
- 子どもが喜ぶ企画として、花火大会の屋台の出し物のような企画があるといいと思う。

(エ) まだ来たことがない人に、来てもらうには

① 初めてさくらリビングに来たきっかけ

- ボランティアを探しており、activoというサイトから見つけた。
- 中学1年生のときに、部活の課外練習でレンタルスペースを借りる機会があり、ここの存在を知った。そのときに、あるボードゲームのチラシを見て、そのボードゲームが好きだったので、それに参加したら楽しかった。
- はじめはボランティアだけの参加だったが、フリースペースを知って利用するようになった。
- 知ったきっかけは、きょうだいが使っていたこと。最初は勉強のために利用していた。

② さくらリビングを利用してよかったこと

- 多くのなかなか体験できない経験をすることができたこと。青少年委員に入って、いろんなイベントを企画、運営したということ。企画を考えるにあたって、会話をしないと進められない。相手に考えを伝えることができるようになった。
- 好奇心と一歩を踏み出す勇気が必要ということを知った。青少年委員が個性豊かで、考える視野を広げることができた。
- ひとりっ子なので、子どもと関わる機会がない。子どもフェスティバルを通して、子どもと寄り添うと同時に、子どもにどう伝えるかを考えたとき、難しいところもたくさんあるということを学ぶことができた。
- スタッフ、利用者の方や委員の方など、様々な人と話すこと。新しい友達ができた。
- スタッフさんに毎回来たときに声をかけてもらえる。第2の家みたいな感覚で、居場所を作ってくれていることがすごくうれしい。

③ さくらリビングを多くの同世代の人に利用してもらうためのアイデア

- 外部の青少年のニーズ調査をした方がいい。小中学校にアンケートなどを取ってもらって、どんなイベントがあったら来たいか、知りたい。
- アニメ、映画、e-スポーツ、コスプレなど、中高生が好きなジャンルのイベントを開ければと思う。

④ インターネットやゲーム等のICT活用

- パソコンの設置。他の青少年の地域活動拠点を小学生のころ利用したとき、パソコンがすごく人気だった。
- テレビを置いて、e-スポーツみたいなことをやれるといいと思った。e-スポーツ大会を開いてはどうか。今でもここでゲームをやっている人もいる。e-スポーツは、体を動かすものだと健康的であり、特にいい。
- VR機器を使って体を動かせる。VRゲームをするときは、ある程度動ける範囲を指定すれば、どこかにぶつかりそうになったときに気づくことができる。

(オ) まだ知らない人に、知ってもらうには

① さくらリビングの認知経路

- ボランティアを探していた。activo というサイトで知った。
- 部活の先輩から。
- きょうだいから教えてもらった。

② さくらリビングの広報に関するアイデア

- X (旧 Twitter) や Instagram、TikTok、YouTube など SNS を的確に使う。大学生や大人は、X (旧 Twitter) を使っている人が多い。Instagram、TikTok は中高生。
- さくらリビングには X (旧 Twitter) のアカウントがあるが、Instagram や TikTok などもあるといい。X (旧 Twitter) は、文字主体。Instagram や TikTok は、画像や動画。文字だけでなく、写真や動画を投稿した方が、同世代の子たちに知ってもらえると思う。
- TikTok など、青少年たちが楽しそうにしている様子や音楽を演奏している様子を直接見せられるとよい。
- 中学、高校、大学には、学校掲示板みたいなものがある。ポスターなどを貼ってもらう、ということはあるのではないかと思う。学校だよりのような紙を配る機会に、半月に1回くらい伝えてもらうことができるのではないか。
- ここは、人がいなくて、立地が良い。第一研修室を開けてもらって、花火大会を見た。人がいないというのを宣伝するのはどうか。
- レンタルスペースの存在と、交流イベントを武器に発信してはどうか。自習は、図書館やカフェで代用できる。さくらリビングならではのことを SNS で発信してはどうか。大学生では学生団体、社会人では会議・面接などで、レンタルスペースやミーティングルームを利用できるのではないか。
- 学校の授業などで、施設の空きスペースを利用して、中高生と話すというような企画をやれば、多くの人に知ってもらえるのではないか。
- 社会人や大人の方に宣伝するなら、桜木町の駅付近など、人が良く通る場所に広告を貼る。学生に対しては、学生がよく通る場所に広告を貼る、などか。

(2) あおばコミュニティテラス (青葉区)

(ア) 自分が居心地がよいと思う場所

※各自ふせんに記入し、他者と被らないと思うものを発表(下記はふせんの内容や音声を基に整理)

自宅等	家、自分の部屋、ベッド・布団、部屋のすみ、トイレ、芝生、リビング、風呂場、冷房がかかった部屋で布団にくるまる、お菓子のストックがある部屋、家の車
学校等	学校、休憩中の教室、部室、図書室、視聴覚室、楽器室、体育館、武道場、学校のラボ、ステージ裏(舞台や発表会のときの幕の裏)
公共施設等	あおばコミュニティテラス、地区センター、公園、図書館、プール、バスのすみっこ席、自然、海、森、芝生
民間施設等	カラオケ、カフェのすみっこ席、和食レストラン、ホテル、温泉、サウナ、美容院、コンビニ、スーパー、ドラッグストア、雑貨店、エレベーター、習い事、バイト先の事務所
〇〇な場所	本がある、遊び道具がたくさんある、カラオケがある、(テレビ)ゲームが置いてある、漫画を読める、プールがある、プールのように水で遊べてかつ本も読める、食べ放題、飲み物が飲み放題、アイスが置いてある、スポーツとかで盛り上がる場所、仮眠がとれる、仲のよい人がいる、色々な人と関われる、共有できる話題がある、話せる人がいる、言語が通じる、お金がかからない、近くていつでも開いている、せまいところ、クーラーが効いていてイートインスペースがある、静かな場所としゃべれる場所が区切られている、遊ぶときは遊べるし寝たいときは寝れる、楽しいと感じる、暗いところ

(イ) 人を集めるための共通点(雰囲気・場・時)

- 目的にあったものがある。色々なものが置いてあり、飽きない。
- 来る人の目的が一致している。
- 自由で楽しい、明るい感じがする。1人で居たいのも自由。
- にぎやかで人との関わりを持ちやすい。
- 適温。
- 明るさ(明るすぎず、暗すぎない)、薄暗い方が落ち着く。
- 音(騒がしすぎず、静かすぎない)、館内BGM。
- 適度な湿度。
- 清潔感。

(ウ) ある場所に初めて行くきっかけ、行き続ける理由

① 初めて行くきっかけ

- 友人、家族の紹介。
- 検索、SNSで見る、ネットの口コミ。
- ポスター・本・雑誌・テレビタウン誌・地域の広報誌で紹介(必要な情報が載っていた)。
- 写真がよかった。
- 飲食店であれば、イベントで出店していて、それが美味しかったら本店に行く。
- 値段。学生だと安いことが重要。
- 場所。駅から近い、普段行く場所に近い。

② 行き続ける理由

- スーパー、コンビニ、学校、塾、会社など、生活する上で何度も行く必要がある（一過性のものでない）。
- そこに所属し、行かないといけないように思う。
- そこに行く目的がしっかりしている。
- 人間関係が良い（美容院など）。
- 繰り返し見ることで価値が生まれる、毎回違う刺激がある（スポーツなど）。
- 楽しかった場所（テーマパークなど）。

（エ）幅広い世代の方への広報の方法

- 友達から紹介。
- 親からの影響も大きいので、親世代をターゲットにする。
- 先生から聞く、学校で説明会等を行う。
- 近所の人からの紹介。
- インフルエンサーから SNS で発信。
- 友達が行ったと SNS、Instagram で投稿していた場所は気になる。文字ではなく画像・映像。
- Instagram、YouTube などで広報を強化する。
- スマートニュース、Yahoo ニュースを利用する社会人は多い。
- 新聞、ラジオで発信。
- 新聞に折り込む、広報誌、回覧板など。
- 電柱に広報を貼る。
- 公民館で周知。
- チラシを作る。置く場所によって雰囲気を変えてもいい。
- インターネットは世界中の人をターゲットにするには適しているが、近くの人を集めるためにはビラ等を配った方がいい。自分で調べようとはしない。パッと見て活動内容がわかるといい。
- 活字は見る気にならないが、手書きの文字だと目を引く。
- ビラにはインパクトのあることを書く。引っ越して初日の人に「引っ越し手伝います」、「地域の情報誌全部おいてあります」など、地域に密着した内容。
- 名刺のサイズだと捨てられやすい。A3 か A4 程度の大きさの紙を配る。裏紙として再利用可能。
- 引っ越してきたときに書類を忍ばせてもらう。

（オ） あおばコミュニティテラスがもっと様々な世代の人に来てもらうには

※話し合いの結果を1人が発表。5年後の生まれ変わった姿を紹介。

- 目印があって、入口がわかりやすく、入りやすい。今の外観だと、初めて来た人は、本当に入っていいのか迷う。
- オープンしていることが外からはっきりわかり、導かれる感じで入ってこれる。
- イベントが多く、来場者も増えている。イベントが楽しかったという人が継続的に来てくれる。イベントに来たことで建物の中の雰囲気もわかってもらえる。
- 「自由に来ていい」だと初めて行くにはためらう。「イベントがあるから行く」だと目的があるから初めてでも行きやすい。
- 月1回「映えスポットの日」があって、写真を撮りに来る人もいる。イベントや飲食もできる。
- オリンピック観戦ができる。

(3) M-base (南区)

(ア) 利用時間や曜日について

① 利用している時間帯や曜日

- 放課後は、バイト、ゲームセンター、カラオケ、学校のフリースペースで過ごすことが多い。
- 学校が早く終わる日は 15 時ぐらいから。通常だと中学生は 17 時、高校生は 18 時頃から。
- マンガ教室で土曜日は 10 時から。
- 夜遅くまでやっているの使いやすい。

② 開所時間や曜日の要望

- 月曜日は憂鬱でちょっと寄り道したい気分が多い。
- 日曜日に開いていれば友達と遊べる。
- 休日は他のところで遊びたいから開いていても拠点には来ない。
- ここが利用できることが学校で知られていない。
- もっと早い時間から利用できるようにしてほしい。

(イ) M-base の施設・部屋・設備について

① 現在の利用方法 (利用目的や主な過ごし方)。

- 家や学校が嫌だと来る。絵を描いて勉強して。話し相手がいる、絵がうまくなりたいたいから来る。
- ストレスがたまるとピアノを弾きに来る。
- イラストや小説、マンガを書いたり、雑談や情報共有の場。

② 施設や設備、利用ルール等についての要望

- パントリーは奥まっていて暗い。レトロなカフェスペースにしたら人が来るのでは？インスタで映えれば来る。あとはオレンジ系の間接照明とおしゃれなおじさんがいれば。
- 来るまで何があるかわからないし、全体的に無機質だから入りにくい。
- 飲み物だけでなくアイスや食べ物を売る自販機、ウォーターサーバーやきれいな冷蔵庫がほしい。
- 学校ではカウンセリングを受けている子も多いので、カウンターやテーブル等のオープンな場所やちょっと離れた所で、堅苦しくなく気軽に大学生ボランティアが相談にのってくれたりしたら来やすい。横浜総合高校でやっている「ようこそカフェ」を参考にしたら。
- 学校のカウンセラーだと親に伝わる気がして怖い。ただ話を聞いてくれる人がいてほしい。あまり関係ができていない人の方が話しやすいし、いろんな人と関わる機会があるのがうれしい。
- 派手な見た目で差別されるから公共の施設はあまり行かない。受け入れられない感じがある。
- 勉強目的で来ることもあるので、教えてくれる人がいるといい。学校で先生に聞くのはハードルが高い。勉強会をしたり、高校生や大学生のボランティアが小中学生に勉強を教えるのはどうか。

(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて

① 過去に参加したプログラムやイベント、ボランティア活動 (よかった点など)

- 縁日で水鉄砲やかき氷を作ったり、祭りでみこしを担いだりした。小さい子と関わるのがあまりないので、いい経験になった。かき氷を渡して笑ってくれたりすると嬉しかった。保護者

にも感謝されやりがいを感じた。

- 文科省主催の駄菓子屋や縁日に参加。普段関わらない地域の人や大人と関わって良かった。これまでは参加する側だったイベントを運営するのが新鮮だった。
- 漫画クラブは、マンガ好きな子が集まっているから趣味が合う人と話せる。絵が好きな人と好きなことを学べる。あまり描かなくてもそこにいたくなる。
- コミティアに参加。非常に有意義で、技術面でも成長した。

② イベントや活動の企画に関するアイデア（こんな活動をしたい）

- ビンゴ大会やダンス、お笑いなど、景品があると盛り上がる。
- 水鉄砲で遊ぶのは楽しかった。
- 町内会イベントもなくなっているので、イベントがあると地域の人と仲良くなる機会になる。
- 学校でやらないような理科の実験。勉強にもなるし楽しい。
- 紙芝居。地域の高齢者に聞いた話を漫画にして紙芝居にしてやる。
- 百物語や肝試し。宿泊体験。
- ツイスターゲーム、しっぽ取りなど、体動かすもの。小さいころに戻りたい子が多い。
- 浴衣着付けや髪の結い方、髪の巻き方、こての使いかた、ネイル、メイク、スキンケアの教室。
- 自分とは別の曜日に M-base を利用している人との交流。
- もっと色んな大人が来てほしい。コミックマーケットのようなイベントがあるといい。

(工) まだ来たことがない人に、来てもらうには

① M-base の魅力を友達に伝えるとしたら？

- どんな人もこの環境にいていいところが M-base の強みで魅力。
- Wi-Fi がある。人と話せる。自由に使える。
- 時間余ったときにいられる場所。とりあえず行ってみて合っていたから、ずっと来ている。
- 人と関わる一歩として。バイトとか難しいという友達が多い。
- 小さい子と関わる機会がある。保育に興味ある子は実際に関われる。
- 多世代との交流できる機会。
- 来るまでは高校生と話したこともなくて怖かった。会ったら優しかった。
- 周囲にダンスやバレエをしている人がいるので、紹介したことがある。
- 他の人が描いた絵を見ることができるので、勉強になる。

② インターネットやゲーム等の ICT 活用について

- 多くの中学生は TikTok をやっている。
- 高校生は友達の Instagram と X (旧 Twitter) アカウントをチェックしている。
- ゲームでポイントを貯めたらベース (拠点内通貨) と交換できるようにしてはどうか。
- 公式 LINE を作って、どんなところか一瞥で見られる。ちょっとしたお悩み相談、やっているイベントを紹介。
- スマホがあるから家でも楽しい。家から出ない子が多い。コロナ以降人に会うのが億劫になっている。
- インターネットで描いてほしい絵を募集し、後日描いた絵をブログなどに上げる。

(オ) 青年館活用のアイデア（横浜青年館の活用方法を自由に設計できるとしたら）

- ① ハード面（施設の設備、機器、道具等）で「こんな施設ならぜひ利用したい」ということ
 - あったらいいもの：防音の音楽室、こたつとみかん、貸し傘、充電器、いいイス、本棚、ソファとテーブル、大型テレビ（スクリーン）、ゲームチェア、パソコン貸出、種類の豊富な色鉛筆、ドリンクバー、冷蔵庫
- ② ソフト面（プログラム、イベント、交流内容等）で「こんな施設ならぜひ利用したい」ということ
 - 茶道・華道の教室。周りにやれる環境がないからやっているならのぞいてみたい。
 - 卓球が自由にできたらいい。
 - 音楽室は、バンド練習や合唱部が使うのでは。地区センターは利用制限がある。音楽室で外部講師の音楽スクール。
 - 和室でマンガ読んで寝転がりたい。
 - 映画鑑賞。みんなで映画を観たら楽しい。
 - トレーディングカードゲーム大会。
 - メイク、ネイル教室、スキンケアの教室。メイクは社会に出たら必要なのに習う機会がない。ネットの情報は正しいか分からない。男性もメイクをする時代。
 - 絵画室で大きな模造紙にみんなで絵を描いたり、書道で大きな文字を書く。

4 調査結果のまとめ

(1) 青少年交流・活動支援スペースさくらリビング（中区）

(ア) 利用時間や曜日について

- 全ての参加者が、現在の開所時間・曜日に関して満足しており、追加的な要望は聞かれなかった。特に、朝の9時から夜の22時まで開所しており、「いつ行っても開いている」ところが良いという意見が聞かれた。

(イ) 施設、部屋、設備について

- 自習スペースなど、混雑しがちな場所があるという意見が上がった。そのような場所について、混雑している場所と空いている場所との調整に関する課題の指摘があった。また、インターネット等を利用した部屋の予約システムを求める声も上がった。スペースの有効活用や利便性の向上に関しては、改善の余地があると考えられる。

(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて

- 過去に参加した活動に関しては、小学生以下の子どもと関わることができるイベントや、飲食を伴うイベントが好評であり、またやりたいという意見が多かった。
- 子どもと関わるイベントでは、子どもに寄り添って考えることが良い経験になったとする声もあり、異年齢との交流の中で、青少年の成長を促す可能性が示された。
- また、さくらリビング利用者以外の青少年との交流や、大人とのかかわりを求める声も多く、居場所を通じた他者との交流が求められていることがわかった。

(エ) 利用してよかったこと

- 様々な活動を企画・運営したり、小さな子どもとイベントで関わる中で、他者に意見を伝えることができるようになったという声が聞かれた。様々な活動を通じて、青少年がコミュニケーション能力を向上させていることが確認できた。
- また、拠点に来るたびにスタッフの方に声をかけてもらえ、「第2の家」のような感覚で居場所を作ってもらえている、という声もあった。

(オ) ICT活用、広報について

- e-スポーツの大会を開いたり、VRゲームができるようにするというアイデアが聞かれた。また、アニメ、映画、コスプレなど青少年が好きなものを積極的に取り入れたイベントを行うことが求められていた。
- 広報にあたっては、SNSを積極的に活用することが重要という意見が多かった。特に、InstagramやTikTokなどは画像や動画を用いて視覚的に訴えかけることができ、中高生がよく使っているという声が聞かれた。
- 学校と連携して、拠点の周知を行ってはどうかという意見が上がった。具体的には、学校にポスターを貼ってもらう、定期的にプリントを配布する、学校の授業の中で拠点を利用する中高生と話す機会を設ける、といったアイデアが聞かれた。

(2) あおばコミュニティテラス（青葉区）

(ア) 利用時間や曜日について

- 居心地がよいと思う場所として、「近くていつでも開いている」という声が聞かれた。また、場所に関しては、駅や普段行く場所に近いと、初めての方も来やすいという意見も上がった。

(イ) 施設、部屋、設備について

- 部屋の温度・湿度や明るさ、音などの環境面が適切であることが求められていた。特に、明るさに関しては薄暗い方が落ち着くという意見や、館内 BGM があるとよいという意見も上がった。
- 現在の外観は、初めての人が入りにくいので、目印をつけて入り口をわかりやすくするとよいという意見が上がった。

(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて

- 来る人の目的が一致しているところに人が集まる、そこに所属しているように感じるとその場所に行き続けたいと思う、という意見が上がった。居場所の機能として、各人が役割をもって活動にかかわり、所属感を感じられることが重要である。
- ある場所に行き続ける理由として、スポーツ観戦を例として、繰り返し体験することで価値が生まれる、毎回違う刺激がある、ということが上げられた。居場所での活動プログラム等の検討にあたっては、利用者が何度も行き続けたいと思えるような仕組み・内容の検討が重要である。
- イベント経由で多くの方に来てもらい、イベントで楽しかった方に継続的に来てもらうとするアイデアが聞かれた。初めて来る方は、「自由に来てもいい」よりも「イベントがあるから行く」という目的を作ってあげられると、来やすいという意見が上がった。
- 月に1回「映えスポットの日」を作り、写真を撮りに来る人を呼んでどうか、というアイデアが聞かれた。青少年の興味に沿ったイベントを開催することが重要である。

(エ) ICT 活用、広報について

- 青少年への広報にあたっては、親や学校経由での紹介が重要とする意見が上がった。
- 中高生向けの広報では SNS での発信が重要とする声もある一方で、インターネットでの広報は世界中の人をターゲットにするには適しているが、近隣の人に来てもらうには別の方法の検討が必要であるという意見も上がった。
- 近隣の人に周知するためには、積極的に自分で調べてもらうことは期待しにくいいため、ピラなどを配るとよいという意見が上がった。また、ピラを作成する際は、活字ではなく手書きの文字、地域に密着したインパクトのある内容を盛り込む、すぐに捨てられないよう A3かA4の紙にする、といったアイデアが聞かれた。

(3) M-base (南区)

(ア) 利用時間や曜日について

- 憂鬱に感じる月曜日にふらっと立ち寄ることができる居場所や、日曜日に自宅と同じように友人とくつろげる居場所として、月曜日や日曜日の開所を望む声が上がった。

(イ) 施設、部屋、設備について

- 内装や外観が明るく、おしゃれで「インスタ映え」するような場所が好ましく、ソファやこたつなど、リラックスできる設備が望まれている。
- ロビーなどオープンな場所で良いので、大学生等普段接しない人に気軽に悩みを聞いてもらいたいとの意見が多く出た。軽易であっても、相談機能が求められている。
- 勉強目的で来る青少年からは、学習支援機能が求められている。

(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて

- イベントを通じた小学生や小さな子どもなどとの関わり合いが楽しいとの声が多かった。子どもの素直な反応とそこから得られる達成感が自己肯定感の向上につながると考えられる。
- また、地域の方など多世代との交流も貴重な経験と考える意見も多数出た。

(エ) 利用してよかったこと

- 家や学校に居たくないときに居られる場所であったり、どんな人もここに居ていいと思える場所という意見があった。M-base が、青少年たちの「第三の居場所」(家庭や学校以外での居場所)として機能していることが確認された。

(オ) ICT 活用、広報について

- 公式 LINE を作成し、どのような場所か、どのようなイベントをやっているか一覧で確認できるようにするという意見が上がった。また、新型コロナウイルス感染症の流行以降、家の中で情報を入手できることが重要と考える青少年もいた。青少年が目にしやすい媒体を用いて広報を行っていくことが重要である。
- ゲームで貯めたポイントをベース(拠点内通貨)と交換できるようにしたり、インターネットで描いてほしい絵を募集し、後日 M-base の利用者が描いた絵をブログに上げたりしてはどうか、という意見も聞かれた。ICT 活用にあたっては、現在の拠点のもつ強みを活かした活用方法が求められている。

(カ) 横浜青年館の活用について

- 音楽室を防音にしてバンド活動や合唱部の練習に利用したり、メイクやスキンケアの教室を開催したりするなどのアイデアが聞かれた。他の施設等ではカバーしにくい青少年のニーズに合わせるサービスの提供が重要である。
- また、茶道や華道の教室といった、普段体験できないイベントへの興味もうかがえた。

(4) 青少年の地域活動拠点づくり事業利用者ヒアリングのまとめ

(ア) 利用時間や曜日について

- 居心地のよい居場所として、「いつでも開いている」ことを求める声が多かった。すべての参加者が現在の開所時間・曜日に関して満足していると答えた「さくらリビング」の開所時間等を参考に、対応可能な範囲内で青少年の利用しうる時間帯に居場所を利用可能な状態にしておくことが、青少年の利用を促す可能性があると考えられる。

(イ) 施設、部屋、設備について

- 部屋の湿度や明るさ、音楽などの環境面に関する意見が複数の拠点でのヒアリングで聞かれた。おしゃれで「インスタ映え」する、またリラックスできるような居場所を用意することで、中高生の利用を促すことができる可能性が示された。居場所の環境の改善にあたっては、現在拠点を利用している青少年が積極的に関われる機会を提供することが重要である。
- 学習や相談に関するニーズも聞かれた。自習スペースの場所を利用しやすくする工夫や、異年齢の青少年が集まっていることを利用した学習支援や相談機能の充実といった取組みが有効であると考えられる。

(ウ) 活動プログラム、イベント、ボランティア活動などについて

- すべての拠点のヒアリングにおいて、小さな子どもや地域の方など、異年齢との交流を重要視する意見が聞かれた。他者に寄り添って考えたり、それに対する反応を受け取ったりする中で、青少年自身も成長している様子が伺えた。青少年が主体的に関与する、地域での交流活動等の促進が重要だと考えられる。
- 初めてその居場所に来る方にとっては、自由に利用できる居場所として開放しているよりも、イベントに参加することを目的とした方が来所を促しやすい、という意見が上がった。実際に、ボランティアなどのイベントをきっかけに居場所を知り、継続的な居場所の利用につながった方も多くいた。青少年にとって魅力的だと考えられるイベント等を積極的に開催することで、居場所事業の利用が促進されると考えられる。
- イベントの内容に関しては、地域交流・ボランティア以外にも、例えば茶道や華道の教室といった、普段体験できないイベントに関するニーズが聞かれた。イベントの企画・運営にあたっては、青少年に積極的に参加してもらうことが重要である。

(エ) ICT 活用、広報について

- 青少年に対する広報においては、SNS 活用を重要視する意見が多かった。特に、Instagram や Tik Tok など、画像や動画を用いて視覚的に訴えることができ、中高生がよく使っているツールを利用することが重要である。居場所の魅力を発信するために、SNS を効果的に運用するには、その拠点を利用している青少年に協力を仰ぐことが有効であると考えられる。
- 一方で、青少年自身がインターネットを用いて検索等をするのを待つのではなく、学校と連携してプリントの配布や紹介を行ったり、地域でピラを撒いたりするなど、プッシュ型のアプローチに関する提案も聞かれた。ヒアリングで聞かれた方法以外にも、学校で配付されている 1 人 1 台端末や、子育てを支援するアプリケーション等によるプッシュ型の情報発信など、様々な方法を検討することが重要であると考えられる。

第2部 社会的養護経験者 ヒアリング調査

1 調査の趣旨

令和4年6月に、こども施策を社会全体で総合的かつ強力に推進していくための包括的な基本法として、こども基本法が成立した。同法では、「全てのこどもについて、その年齢及び発達の程度に応じて、自己に直接関係する全ての事項に関して意見を表明する機会及び多様な社会的活動に参画する機会が確保されること。」を基本理念の1つとして掲げており、こどもに関する施策を検討する上で、こども本人の声を聴くことが重要であるとしている。

令和4年6月に成立した改正児童福祉法では、都道府県、政令指定市、児童相談所設置市で行う事業として、「社会的養護自立支援拠点事業」を新たに位置付けている。同法第六条では、当該事業は「措置解除者等又はこれに類する者が相互の交流を行う場所を開設し、これらの者に対する情報の提供、相談及び助言並びにこれらの者の支援に関連する関係機関との連絡調整その他の必要な支援を行う事業をいう。」としている。

横浜市では委託事業として、児童養護施設等の退所後児童のアフターケアを行う「よこはま Port For」を運営している。「第3期子ども・子育て支援事業計画」の策定に向けて、社会的養護経験者への支援の充実を検討するため、現在「よこはま Port For」を利用する青少年に対して、以下に示すヒアリング調査を行った。

2 調査の概要

(1) ヒアリング対象者

「よこはま Port For」を現在利用している、または過去に利用したことがある社会的養護経験者の男女5名

(2) ヒアリング日時

令和5年10月

(3) ヒアリング実施場所

「よこはま Port For」または横浜市庁舎

(4) ヒアリング実施方法

各対象者に対して、「よこはま Port For」職員1名が同席の上、個別にヒアリングを実施

(5) 調査項目

- ・「よこはま Port For」の利用状況等
- ・社会的養護経験者の困りごとや不安、支援ニーズ等

3 調査結果²

(1) 「よこはま Port For」の利用状況等

(ア) 「よこはま Port For」を知った経緯・利用し始めたきっかけ

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">● 高校3年生の冬に、横浜市の継続支援計画の関係で、児童相談所から、ブリッジフォースマイルの職員を紹介してもらい、その流れで「よこはま Port For」を教えてもらった。その後時々、「よこはま Port For」が開いてない時間等にも、継続支援計画の話をしに来たり、相談事をしに来たりということで、利用を始めた。 |
| <ul style="list-style-type: none">● 施設にいたときの担当職員と、退所後も仲が良く、食事に行ったりしていた。20歳頃、自分が人と関わりを持たないことを気に掛けてくれた職員から紹介いただき、一緒に来たのがきっかけ。 |
| <ul style="list-style-type: none">● 知ったきっかけは、児童相談所から紹介があったこと。利用したきっかけは、よく「よこはま Port For」を使っていた自立援助ホームの同居人の紹介で、一緒に来たこと。 |
| <ul style="list-style-type: none">● 中学3年生の高校受験の際、施設から紹介があり、面接練習のために利用した。 |
| <ul style="list-style-type: none">● 高校3年生のときに、ブリッジフォースマイルがやっている巣立ちプロジェクトに参加したことが最初に関わったきっかけ。その最終回に、「よこはま Port For」の見学をした。高校卒業のタイミングで、よこはまブリッジフォースマイルの職員に継続支援計画を作成してもらった。その職員と、施設の退所後も連絡を取ったり会ったりしていた。子どもを妊娠して、親に頼れず、誰に相談したらいいかもわからなくなったときに、お世話になっている職員に連絡し、「よこはま Port For」を利用するようになった。その職員の方には、お金の面のサポートに関する相談もしていた。 |

² 各項目に関して、対象者から得られた発言内容を枠線の内部に箇条書きで示している。また、異なるヒアリング対象者による発言を点線で区切っている。

(イ) 「よこはま Port For」での過ごし方

- 利用は基本的には平日で、土日には利用したことがない。一般的には開所していない時間に来て、主に面談をする。利用頻度は2、3か月に1回ぐらい。
 - 職員が、ひとり暮らしの様子を見に来ることもある。ひとり暮らしをする際には内見に職員がついていった。職員がメールで時々様子を聞いたり、自分からも、困ったことがあったら電話をしたりしている。
 - 高校生のときには学校終わりに来たりしていた。高校3年生の冬からだったので、高校生のときの利用は計2回ぐらい。
-
- 最近には行っていないが、基本的に金曜日が多く、開所直後くらいによく行っていた。土日はあまり来ない。
 - 最初に来たときは、退職後の転職活動中の時期であり、時間があったり来ていた。1年半くらい就労支援に使わせてもらっていた。
 - 過ごし方としては、スタッフとの雑談、料理と食事、その後閉所するまでみんなでゲームをして過ごすなど。
 - 仲のいいスタッフがいる。外で一緒にスポーツをすることもある。
-
- 現在はそんなに来てない。最近は金曜日に、時間が空いたら来る。
 - 友達に会うために利用している。友だちと話したり、ゲームしたり、料理をつくったりしている。閉所の時間までいる。
 - 毎週野菜を送ってくれている農家の方に、お礼に行ったことがある。
-
- 現在は利用していない。
-
- 家が遠いため、「よこはま Port For」に来ることは多くない。外で職員と食事しながら相談に乗ってもらったり、月に1回食料品を送ってもらったりしている。職員との面談の際に、食料品を持ってきてもらうこともある。
 - 働いていると、休みの日も外に出ることがない。高校卒業直後は、クリスマス会みたいなイベントには参加していたが、働き始めてからは参加しなくなった。仕事の疲れもある。

(ウ) 「よこはま Port For」を利用してよかったこと

① 職員や他の利用者との交流・相談について

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">● 面談・相談できるのはよかった。● 落ち着く、ほっとするという感覚はある。いろんな人がいても別にそんな気にならず、落ち着ける。1人で相談をしに来たときも、話がしやすい。● 来る時間によっては別のスタッフの人がいるので、その人たちと話をしたりするのも面白いなと思う。 |
| <ul style="list-style-type: none">● 年の近い、馬が合う友人ができ、よく遊ぶようになった。また、スタッフ含めて、みんな性格が良い。● 雑談の場としてよい。 |
| <ul style="list-style-type: none">● 同じ境遇の仲が良い友達ができ、自分が苦しいときに、理解してもらえる人が増えたのは大きい。● 困りごとがあったときに、スタッフの大人の意見を聞ける機会が増えたこともよかった。初めて来たときに関わったスタッフの人には、悩み事を相談しやすい。 |
| <ul style="list-style-type: none">● 高校3年生のときの巣立ちプロジェクトに参加していたときは、いろいろなところの施設の子たちが集まっていた。そこで仲良くなった子で、今でも月に1回くらい会っている子がいる。施設出身同士だからこそわかり合える話もあって心強い。● ブリッジフォースマイルの職員の存在は大きい。相談しようと思ったときに最初に頭に浮かぶのは、その職員で、いろいろなところと同行してくれるので心強い。自分だけではなくて、自分の子どものことに対しても、一緒に動いてくれる。● 施設を退所しても、これだけサポートしていただけるのはありがたい。退所してからは1人で何でもやらなければいけないと思っていたが、とても頼らせてもらっている。 |

② 寄付等の支援について

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">● 寄付品は非常にありがたい。食品や、美容品・化粧品は重宝している。アルバイトしていたときは夜遅くまで働いており、スーパーが空いている時間に寄ることができず、食料品を買うということがなかったが、「よこはま Port For」で乾麺等をもらえるだけでもすごくありがたかった。シェアハウスにもフードバンクがあるが、場所が空いている時間に行けない。「よこはま Port For」は自分が行きたいタイミングで来ることができるということも大きい。 |
| <ul style="list-style-type: none">● 食べ物もらえるところも助かっている。 |
| <ul style="list-style-type: none">● 月に1回食料品を送ってもらっており、大変助かっている。食費も月に3万円くらいかかるところが、半分くらいになったりする。お米や麺をもらえるのがとても助かる。 |

(工) 「よこはま Port For」への要望等

① 施設・機能について

<ul style="list-style-type: none">● 面談室がもっと増えてほしい。現在は少し狭く、倉庫のようになってしまっている。面談をするにあたり、他の利用者の方がいると、少し落ち着かない。
<ul style="list-style-type: none">● 部屋数が多いといい。自分が利用している他都市の居場所は、1人でいたい子が1人でいられる場所があって、みんなでワイワイしたいときはみんなで集まれる場所がある。そうになると、利用しやすい。
<ul style="list-style-type: none">● 家や施設にいたくないときに、1、2泊できるような機能があるといい。前の施設でも、実際に飛び出してしまう人がいた。逃げる場所がないというのは苦しい。● 飛び出したくなるときの多くは夜。そういうときに逃げ込める場所として、食事をとれることやお風呂に入れることが必要。また、とにかく話を聞いてもらって消化させたいという子もいるので、安心して話せる人が1人は必要。友達だと、話は聞いてもらえるけれど、具体的な解決策が思いつかないまま、もやもやして、また爆発してしまう、ということもあるかもしれない。育った環境が異なる友人には相談しにくい、ということもある。そこにいる人は、あまり知らない人でも、安心できるお墨付きがあって、専門的なアドバイスをくれる人であればいい。
<ul style="list-style-type: none">● こういった場所が家の近くにもあるといい。ここに来て食料品等を持って帰るとなると、重くて大変。交通費が出ても、距離が遠いと、食料品を持って帰ったり、移動時間を考えたりすると、頻繁に行かないと思う。

② イベント等について

<ul style="list-style-type: none">● イベントなども随時やってくれているが、予算の制限がある。職員も、イベントの際は利用者の声を聞いてくれる。野菜等を寄付してくれる農家さんに挨拶をしに行ったこともある。仲のいいスタッフと温泉などに行ってみたい気持ちはある。旅行のついでにその地域のボランティアに参加することも考えられる。
<ul style="list-style-type: none">● 季節ごとの行事などを大々的に、一緒に楽しめる場所だといい。● お菓子づくりなどを教えてくれる先生が来てくれるとなったら行くかもしれない。料理教室みたいなのがあったら行きたいと思う。節約できるレシピなど、ひとり暮らしに役立つ知識を教えてほしい。
<ul style="list-style-type: none">● 自分が利用している他都市の居場所は、イベントも多い。サッカー観戦のチケットもらったからみんなで行く、地域のスポーツのイベントに参加するなど。みんなでカラオケに行こう、みたいなこともある。ボランティアの人に、料理など、全部してもらえるのも大きい。定期的なイベントとして、ごはんやお菓子を作ってくれて待っていてくれている、というものがある。実家に帰ってきた感じがあり、気が張らずに参加できる。ひとり暮らしだと、毎日自分で全部やらなければいけないので、してもらえる日があると、ありがたい。

③ 経済的支援について

<ul style="list-style-type: none">● 「よこはま Port For」に通うための交通費が出たらいい。● 夕食代の補助があるといい。また、予約せずに食事ができるといい。
<ul style="list-style-type: none">● 自分が利用している県外の居場所は、交通費が支給されるため、遠くても行くことができる。交通費が出ないと、県内の居場所でも行こうと思わない。交通費が出れば、その分を食費に回せる。

④ ルール・雰囲気等について

- 「よこはま Port For」などで仲良くなったスタッフと、申請がないとどこかに一緒に行けない、みたいなものを緩和してもらってはどうか。企業への訪問や、役所への申請の際に、一緒に来てもらいたいときなど、気軽に頼めるといいと思う。
- 相談したいときも、事前予約をして来なければならない。緊急性がある場合でも電話での対応はしていないので、相談しにくさがあると思う。相談しにくいことで、相談すること自体を諦めている人もいる。そのまま抱え込んで、駄目になってしまう子もいるかもしれない。緊急時に相談しやすい体制があるといい。
- 「よこはま Port For」は、利用回数や時間の制限もあり、ルールが多いという印象を受ける。利用者はもう大人なので、ルールは最低限でいい。また、「よこはま Port For」は、空間がらんだような感じで、会議室のような冷たい印象を受ける。利用者がお客さんになっているような感覚もある。
- 「よこはま Port For」は利用していない。固い、静かなイメージがある。自分が利用している他の居場所は、ゆるい、自由なイメージ。年の近い施設出身者や、施設の職員経験者がスタッフをしていたり、ボランティアに来ていたりして、ワイワイしている印象。利用者の中に、支援活動を実際にやっている子がいて、前向きな人が多い。もともと居場所に対して、傷のなめ合いみたいな感覚があったが、そうでない場所に居られる方が、自分の精神衛生上良い。利用している若者が主導で居場所を作っていけるといい。監視されず、任されている感覚。また、職員との距離が近く、相談がしやすいといい。
- 「よこはま Port For」は、ちょっとしんみりしたイメージがある。もうちょっとにぎやかな方が行きやすい。その方が、イベント等も楽しいと思う。

⑤ 開所日について

- 「よこはま Port For」以外の場所に関して、「よこはま Port For」のように開いていて、居場所的なことをやっているところは、横浜ではそんなに多くない印象。退所するときには教えてもらうのは、大体は「よこはま Port For」。自分は「よこはま Port For」が合っていたのでよかったが、平日行く場所がない人であれば、平日開いているところが必要。平日学校が終わってから家や施設に帰りたくない高校生は多い。そういう子の居場所が少ない。
- 最近の仕事の関係で週末が忙しく、来られないことが多いが、特に時間の枠を増やしてほしいとは思わない。

⑥ 「よこはま Port For」以外にもあるといい場所等について

- バイトやひとり暮らしでカツカツな子もいるので、子ども食堂とまではいかななくても、少し集まってみんなでご飯が食べられるところがあった方がいいのかなとも思う。
- 自分は里親出身で、施設で育ったわけではないので、同じ環境で育った横のつながりや、友だちがいるわけではない。1度だけ「こどもみらい横浜」のイベントに行ったことがあるが、少しなじめず、同じ状況の友達を作りづらいと感じた。ブリッジフォースマイルの巣立ちセミナーはすごく楽しかった。
- 最近食料品の物価が高いので、「よこはま Port For」以外でも食材をもらえる場所があると助かる。

(2) 社会的養護経験者の困りごとや不安、支援ニーズ等

(ア) 社会的擁護下の中高生にとって必要な支援等

① 児童相談所や施設等の職員・相談相手について

- 児童相談所のケースワーカーが高校3年生のときが変わってしまったのは嫌だった。高校3年生になると、早い段階から、ひとり暮らしをどうするか、自立援助ホームに行くのか、措置延長するのかなど、いろいろ話すことが増える。金銭管理の相談などもたくさんした。親と話すこともあり、その際の立ち合いがケースワーカーの方であったため、より信頼できる人であった方がよかった。
- カウンセリングなど、自分の気持ちを聞いてくれる人が必要だった。
- そもそも施設の職員の数が足りていない。1人で1ユニット見ているので、子どもは気を遣って相談もできない。周りの小さい子を優先する必要もある。進学などの情報に関しても、情報が欲しいと伝えることも難しい。職員が増えれば、もっと1人ひとりに向き合える。アフターケアにも人員が回せていない状況だと思う。
- スタッフの対応については、子どもによっても合う・合わないがあるので難しい。経験値がないことに対する対処は難しい。
- 子どもたち同士でいざこざがあったとき、職員が強制的に介入し、その子どもたちを引き離して、こうしなさい、ああしなさいと言うのは、その子どもたちのためにはならない。なぜもめたのかを、自分たち自身で互いにすり合わせないといけない。もめたとき、子どもたちを引き離すのではなく、その場にいた状態で、お互いになぜ怒っているのか、相手に対してどう思っているのか、ということその場で互いに自分の気持ちを吐露してもらった方がいい。そういうことができれば、子どもたちも、納得でき、自己解決能力を高めることができるように思う。その場で解決してあげた方が子どもたちも素直に聞く。

② 体験・経験について

- 絶対にアルバイトはやらせた方がいい。施設は閉鎖された空間で、外部とのコミュニケーションがない。施設の中で、ミスをしたり、悪いことをしたりしても、自分の責任について考える機会はあまりないように思う。アルバイトをすると、社会に足を踏み入れている状態になる。アルバイトを通してお金を稼ぐことの意義や、責任感みたいなものを学習させるとよい。そのまま大学に行ったり就職したりするよりも、圧倒的に社会経験になる。それぞれの子どもの事情があるため、アルバイトをできない子もいると思うが、それを考慮した上で、ある程度はやらせないと、その子のためにならない。
- 自分は、様々なアルバイトをする中で、何を面白いと思えるか、何が得意で何が苦手なのかを知ることができた。また、苦手なことについては、その対処方法を考えることもできた。そういった意味で、自分を知ることができたと思う。自分が苦手だと思っていたことについても、やってみたら意外とできる、ということもある。
- モデルとなる大人、自分の視野を広げてくれる人が必要だった。中高生のときは、家庭の中で視野が非常に狭く、自分を変える気力もなかった。視野を広げるための、何か体験ができる機会を与えてもらえることが、必要だったかと思う。
- 施設にいる間に先輩の姿を見ることができるといい。先輩が退所したら、生きてるのかどうかもわからない。大学の様子なども聞くことができる。

③ 規則等について

- 不眠症だったので、夜に外出して散歩したいという気持ちはあった。外の空気にあたって気持ちを落ち着けたいとき、門限をかけられてそれを禁止されると、ストレスが溜まっていってしまう。
- 門限が厳しすぎた。高校生の門限が20時だったので、遊んで帰って来れないし、遠出もできない。スマートフォンを持っていたら、連絡を取ることができ、門限も緩めることができると思う。打ち上げなどの場合は、1時間門限を延ばすこともできたが、1時間では足りない。
- スマートフォンは持たせた方が絶対に良い。中学生はスマートフォンを持ってなかったり、高校生になってもルールが厳しくてスマートフォンを持ってない時期があったりして、クラスになじみにくかった。打ち上げに呼ばれないこともあった。スマートフォンがないと、友人関係で難しい面がある。スマートフォンを持ってないとSNSを使うことができず、周囲と会話が噛み合わない。それが辛かった。SNSで、高校の入学前にグループができていた。そういう状況になっていることも知らなかった。入学式に行ったら、みんな知り合いで自分だけ1人という状態。学校では、コミュニケーションツールとしてSNSを当たり前のように使っているので、部活や生徒会の連絡もできずに困った。思い出の写真を取りたい時期でもある。それができないのは辛かった。退所する際、スマートフォンを持っていなかったため、連絡先が分からず、横のつながりも今はない。
- SNSを使ったことがないから、施設を出た後、どう使えばいいかわからない。SNS上のいじめは減ってきていると思う。最近は後輩などからも聞かなくなった印象。SNSで問題を起こす子はいるが、知識を持たずに大人になって、その後に問題を起こした方が大変だと思う。進路に関して、スマートフォンを持っていないから調べることができない。入学説明会なども、全部スマートフォンで予約するシステムに変わってきている。スマートフォンがないので、情報が入ってこなかった。情報がないと生きていけない社会なので、スマートフォンがないのは生きるうえで大きなハンディキャップになっている。
- アルバイトをして、ある程度貯金ができたらスマートフォンを持っていいという施設はあるが、そもそもアルバイトの申込もスマートフォンで行うようになっている。スマートフォンの利用が大分自由な施設もある。1度見学させてもらったことがある。Wi-Fiもあり、就寝時は預かる形だが、比較的自由に持たせていた。
- アルバイトが続かなかった要因として、職場が合わないことに加え、幾ら稼いでも、使える金額が変わらないことが大きかった。自分の稼いだお金から一定の金額しかお小遣いに回せず、それ以外は全部貯蓄に回される。先のことを見据えて稼ぐというメンタリティーをしている高校生はいないので、稼ぐ意欲がなくなる。周りはアルバイトで得たお金で遊んでいるのに、自分だけ使えないのは辛い。貯蓄することも必要ではあるが、貯蓄とお小遣いのバランスについて交渉ができてよかった。

④ その他の支援ニーズ等について

- 今は週末里親みたいなのも出てきているが、外で安全に泊まりに行けたら、うれしかったかもしれない。里親の方も、毎日顔を合わせていると、お互いに苦しくなるところもある。
- 自分の里親は、自分が友だちの家に行くのが結構怖いというタイプの人で、余り泊まりに行くことはできなかったが、ちょっと泊まりに行きたい、どこかにお出かけしたいな、ということもあった。1日・2日離れて泊って戻る、というようなこともあったらよかった。
- 自立援助ホームで、同じ児童養護施設から来ていた子達で集まって盛り上がり、ルールを守らないこともあった。それは避けてほしいと思っていた。イライラしてしまい、引っ越すきっかけにもなった。境遇が同じだからこそ、比べてしまうという部分があると思う。職員の方に相談しても、なかなか話が進まなかった。
- 自立援助ホームにいて、児童養護施設にいた子どもたちは、自立をするということに対する当事者意識があまりないように思った。最初はみんな頑張るが、だんだんと崩れていく子を何人も見てきた。
- 母親が外国籍で、子どもは勝手に育っていくもの、という考えをしていた。無神経なところがあり、そういうのに対してイライラしていたことがある。同じ境遇の友達が1人でもいたら、良かったかと思う。
- 外国籍の親への支援は必要だと思う。借金があるにもかかわらず金銭面で楽観的な人もいる。

(イ) 施設等を退所する際に必要な支援等

① 進学について

- 進学先のこと、自分の気持ちと、前に行っていた自立支援ホームの人が勧める方向が違っていた。そのとき、「よこはま Port For」で相談させてもらった。相談先が1つだけだと、それしかないと思ってしまうので、「よこはま Port For」に相談できてよかった。
- 成績はよかったので大学進学を勧められたが、お金がなかった。奨学金を借りても、どうせ借金だと思って行かなかった。施設や里親の出身者に対して、給付型の奨学金や、金銭的な負担を減らしてくれるような制度があれば、進学していたかもしれない。
- 経済的な理由で進学を諦めている子も周囲にはいた。大学に行っても仕方がない、とも言っていた。また、遊びたいから大学に行く、という子もいた。
- お金があったら、大学や専門学校に行きたかったと思う。しかし、家に帰れず、1人でやっていかなきゃいけないからお金も稼がないといけないので、そういう選択肢を外していた。中学生くらいから、自分は就職するんだと思っていた。
- 進学のサポートに関して相談できればよかったが、しなかった。よく話していた職員もパートの方で、施設にいたときは相談できる人がいなかった。
- 奨学金について調べることもなかった。自分から進学したいって思っても言えない中高生がいたとして、進学の費用やそのサポートについて教えてもらえるセミナーのようなものがあれば、進学も選択肢に入れていたかもしれない。
- 進学したかったが、コロナでアルバイト先がつぶれてしまい、その後始めたアルバイトもうまくいかず、就職に変えた。余りに急に就職に変えたので、適当に決めてしまい、その後過労で倒れて退職した。
- もともと進学を希望していたので、高校1、2年生の段階から、奨学金の情報は欲しかった。進学に必要な費用や授業料がある。それを奨学金でどれだけ賄えるのか、全く分かっていなかった。もっと早い段階から知っていたら、目標を設定できた。学力があっても、学校に行けない。お金の余裕が周りとは違う。スタートの段階から足並みをそろえさせてほしい。奨学金や、就職の後どうするのか、ひとり暮らしをした後、どうやって実際に生活するのか、具体的なイメージができないから、進路選択がとても難しかった。奨学金や住まい、お金の使い方などに関しては、みんなが見ることができるよう、ある種データベースみたいなものがあるといい。
- 高校卒業後は進学予定で、進学先も決まっていた。ただ、自立援助ホームに入る予定が入れなくなってしまい、進学を断念することになった。仕方なく両親の家に住むことになったが、3か月程度しか続かなかった。その後友だちの家で生活して、その後あるシェアハウスにたまたま空きがあり、住む形になった。

② 就職・資格取得について

- アルバイトをする生活で半年くらい過ごし、支援機関を通じて仕事を探していたが、その社長に職員として働かないかと誘いを受け、正社員として就職することになり、ひとり暮らしもすることになった。
- アフターケアの金銭的なサポートはすごく嬉しい。最近、資格取得補助（「トットコ・シカク」）の制度を使い、車の教習所に通っている。補助金等の紹介は、「よこはま Port For」の職員から教えてもらうことが多い。
- 企業選びに失敗した。学校で求人リストをもらい、見学に行って一番対応が親切だった会社に高校卒業後に入社した。施設や先生には相談せず、1人で決めた。入社半年程度で現場責任者の代わりの仕事を任されていたが、業務量が多かったり、自分への期待値が高すぎたりすることがストレスになり、体調を崩してしまい、退社。企業選びは失敗だったが、自分は仕事ができるという自信はついた。その後1年半くらい就労支援を利用した。
- 長く施設にいと、スタッフもその子の性格や得手不得手がわかる。仕事選びに当たっては、その子のことを深く理解しているスタッフからアドバイスをもらえれば、安心して就職ができると思う。
- 就職した後、施設の担当スタッフが、最初の1年間は、毎月必ず1回くらいは食事をする約束をして、そこで愚痴を聞いてもらったり、相談できれば、多少楽になるかもしれない。企業によっては、その企業の先輩にそのような役割になってもらうこともあるが、合わない先輩を任命されることもある。
- IT関連の企業に入社した。高卒が少なく、また1人だけ全く知識がない状態。周りよりも勉強しなければならず、3日寝ないこともあった。また、周りは全員実家が寮暮らしだったが、自分はひとり暮らしだった。そこを配慮されずに、周りと同じ量を求められても難しかった。
- 高校卒業後の就職は、スムーズに決まった。学校では面接練習などでサポートしてもらった。就職先は、寮付きでボーナスが良い職場を学校の先生が見つけてきてくれた。その後、きりのいいタイミングで資格を取って、働きたかった介護の仕事 시작했다。

③ 住まい・ひとり暮らしの困難について

- 両親の家を出ることになったときには「よこはま Port For」に電話をして、相談した。住むところがないというところから始まったが、いろいろ相談して、紆余曲折を経て就職・ひとり暮らしするに至った。ひとり暮らしの支援金の申請をしたが、金額に限りがあり、申請が遅くなると支援を受けられないのではないかと噂も聞いた。そのあたりの情報提供やサポートがもっとあったらうれしかった。支援金は、里親の方が「こどもみらい横浜」からくるお知らせに目を通して見つけてくれた。
- 引っ越し費用や、引っ越したことによって必要になった日用品に、非常にお金がかかった。そのときに、引っ越し費用を少しでも負担してくれる制度があればよかった。
- ひとり暮らしの辛さは実感したので、それを早めに知りたかった。
- 高校卒業後、ひとり暮らしを始めると、今まで施設で貯金してもらっていたお金が、全部自分の手元に来る。お金を使い過ぎたことがあった。毎月このくらいお金をもらって、いくら貯金して、これにいくらかかる、みたいなやりくりがわからなかったから大変だった。施設に居た頃は門限があり、それもなくなるので遊べる。その分お金を使ってしまう。施設でお金のやりくりを練習する機会があったが、1、2週間やってみるのとは訳が違う。また、ひとり暮らしだと家事もする必要もある。施設から離れたところで部屋を借りて練習してみたら、現実感が湧くかもしれない。

④ 相談先・居場所について

- 自分は、困りごとなどがあると面談をたくさんしたいタイプだったので、「よこはま Port For」のような場所がもっと利用しやすくなったら嬉しい。人によって合う・合わないがあると思うので、面談できる・相談できる場所がもっと多様であって、わかりやすいとよい。
- 青少年相談センターを紹介された経験もあるが、さらっとしか紹介されなかった。青少年相談センターの相談の方が合っているという人もいるかもしれないので、そのような情報等がもう少しわかりやすいと、人によっては嬉しいのではないか。
- 相談先を紹介されただけで、1人で行かなければいけない、というのは、ハードルが高い。1回一緒に行ってくれれば、行きやすさは全然違う。ひとり暮らしすると役所関係の手続きなどが増えるが、自分はそういうことが苦手なタイプなので、「よこはま Port For」の職員の方に同行をお願いしている。そういったことも手厚くしてもらえるとよいかもしれない。
- 世帯分離の手続きも、18・19歳の子が1人で対応するのは難しい。そういうところのサポートをしてもらえると嬉しい。
- 相談できる場所があると、自分の考えを肯定するきっかけになり、後押ししてもらえる。自分の意見が正しいのか、間違っているのか、常に確かめたい気持ちがある。
- 退所するときに大変だったことは、それまでに積み重ねてきた問題が全部そこに押し寄せてきただけ。全部自分の思い通りの進路選択とするのは難しいが、そこに寄せるためのサポートが足りなかったゆえに、大変な思いをするのだと思う。
- 施設が、退所した後に帰って来れるような場所であってくれるならば、退所するときに、問題は少ないと思う。一般的な家庭には実家がある。施設の出身者は、退所したら部外者になってしまう。自分は今部外者なんだという気持ちを持ちながら帰るのは苦しい。コロナで施設に帰れなかった、ということもある。帰れない期間が長いと帰りにくい。3か月に1回くらい、自由に帰ってきてもいい機会があると、帰りやすい。クリスマス会や同窓会であれば、部外者としても堂々で行ける。
- 税金や、公的に提出する書類なども難しい。

(ウ) 現在の困りごとや不安、及びそれに対する支援等

① 修学・進学について

- 現在大学に通っているが、今後学費が足りなくなる。給付型奨学金をもらっても難しい。また、大学を卒業したら、ひとり暮らしをする必要が出てくるが、貯金も難しい。
- 大学で必要なものに対する出費も大きい。そういったものの補助が充実しているといい。寄付を募ったり、補助するための基金があると嬉しい。
- そのうち進学をしたいと思っているが、時間が取れない。
- 専門学校に通っていた子で、途中からやっぱり自分はこの道じゃないと思って学校辞めたくなくなってしまったが、100万円くらいの奨学金は返さないといけない、ということがあった。そういった場合の、進路変更に伴うお金のサポートがあるといい。

② 就労・資格取得について

- 営業の仕事をしているが、その技術にあまり自信がない。営業の経験がある人にアドバイスをもらえる機会や、職種別セミナー、技能習得の支援が、金銭面も含めてあるといい。
- 就労支援を受けているとき、外部講師を招いてのセミナーがあったりしたが、全然興味が湧かなかった。自分が興味のある業種等のセミナーに対する費用面の補助があると嬉しかった。
- 自動車免許の取得費用の補助はあるが、先に自分が払う必要がある。今の出費を抑えたいので、先に負担してくれる支援があればありがたい。
- スーツ代などの就職活動にかかる費用も心配。
- かながわつばさプロジェクトという基金を利用して、転職にかかる費用を補助してもらったり、プラン・インターナショナル・ジャパンから給付をもらったこともあった。資格取得にあたっては、会社から補助が出た。

③ 住まいについて

- 住まいに関して、自分は分籍をしたので戸籍は1人になっている。家族は絶対に連絡を取りたくない状態なので、次引っ越すときの保証人をどうするか、という不安がある。保証人が必要だから、引っ越しを躊躇してしまう。いまの住所に縛られると、仕事も限られてしまう。
- 施設出身の子が住みやすい、保証人の問題にも対応してくれている住まいが用意されているといい。健康面の問題もサポートしてもらえるとと思う。Masterpiece等のシェアハウスは、うまくやってると思う。そういった情報を、施設を出る際に教えてもらえると、精神的なストレスも大分緩和される。
- 自分は、生活がすごい不規則なので、迷惑をかけたくないこともあり、シェアハウスは入りにくい。
- 今住んでいるところは家賃が高く、引っ越したいけれど引っ越し費用が工面できないので、その補助をもらえるといい。初期費用は少なくとも30万円程度はかかり、既存の補助では金額的に難しい。市営住宅だと、抽選になる。
- 一時的に安く住める場所があれば違うと思う。そこで初期費用のお金を貯めて、引っ越しができる。

④ 心身の健康・孤独感について

- 体調を崩したときに困った。そのときは里親の方に電話をして来てもらった。近くに住んでいたのがよかったが、遠くに住んでいたら厳しかった。
- 体調が悪かったときなど、働きに行けなくなることもあると思うので、食料の支援があるといい。切羽詰まって生活している感じがある。精神的な疾患もあり、そういう部分が不安になる。
- ひとり暮らしで帰る場所もないので、ふとした瞬間に寂しさに襲われる。お盆やクリスマス、正月など、家族と過ごす時期に孤独を感じる。孤独感を紛らわすために、仕事をたくさん入れている。
- コロナに感染したときに頼れる人がいなかった。そのときは施設の職員さんに電話をかけて、助けてもらった。それがなかったら死んでいたと本気で思っている。病気の時こそ孤独を感じる。今健康を崩したら終わりだと思う。アルバイトもできず、家賃が払えなくなる。いざとなったときに、お金を家族に頼れないので、その辺のサポートがあるといい。今は熱が出てアルバイトに行っている。
- メンタル面の不調の際に、支えが必要。これは施設出身者だけでなく、現代社会が抱える問題。アメリカだったら、かかりつけのメンタルケアの医者があるのが当たり前。日本だと行きづらい。その辺の理解がないのは、社会全体の問題だと思う。そのサポートがあるといい。
- どのようなサポートが良いかは、不調の原因にもよる。職場のストレスであれば、中小企業が多く、労働組合がないために、労働者にとって良い職場環境になりにくいことが1つの要因だと思う。中小企業でもストライキや交渉ができるようになるといい。情報社会に対してのストレスには、SNS が関係していると思う。本人の問題。SNS に近い人ほど、メンタルを崩しやすい。
- みんな多分心の拠り所がない。宗教であれば神様の教えがはっきりしているが、SNS に頼っても色々な答えがあって、それぞれが矛盾するから、不安定になる。その根本に、国に頼れないということが大きい。
- 日本は精神科に行きにくい。精神科に限らず、病院が全体的に、どこか悪い人が行くもので、予防のために使えない。精神科に若い子がいると、変な目で見られるし、多分産婦人科なども、女子高生がいたら変な目で見られる。それですごいストレスが溜まっている子が周りに多く、よく相談される。一緒についていくこともある。若者向けの病院を作ればいいとも思う。若者なら通って当たり前で、変な色眼鏡で見られない精神科や産婦人科みたいなものがあるといい。学校内に病院があればいいとも思う。学校の良くないところで、カウンセラーが1人しかおらず、使える人数が限られている。そうすると、そこに行く人は重症、という色眼鏡が学生の中にもかかる。カウンセラーが常に何人かいる状態で、誰でも休み時間に来てもいい、くらいの状況を作ってあげればいい。急に問題を抱えても、関係性を築けてないのにカウンセラーに相談できるわけがない。常に顔を合わせている人であれば、相談したいと思える。特に産婦人科など、繊細に扱わないといけない部分は、もっと学校で取り組んだ方がいい。

⑤ 経済的な支援について

- 受け取れる可能性がある支援の一覧表みたいなものがあると助かる。ただ、寄付の多寡によって補助がもらえないこともあり、当てにしていたのに実際に利用できない、ということだと困る。
- コロナ禍にブリッジフォースマイルの緊急支援として、資金援助を受けたことがある。そのときは、コロナとは関係ないが、未経験の仕事で休職と復職を繰り返していた時期であり、収入が少なく困窮していた。そのときの支援はありがたかった。
- 保険のセミナーなども、参加しておけばよかったと思うが、言葉が難しく、なかなか参加しようと思えない。
- 物価が高い。

⑥ 相談先・居場所について

- 地方の施設出身の子の話で、仕事で上京してきたけれど、その仕事がなくなってしまって、何もできなくなってしまった、ということがあった。頼れる人もいないし、地元の職員の方もアフターケアだからといって来てもらえるわけでもない。東京の施設の子が北海道に行った、という例も聞いた。地元の措置してもらったところから離れてしまって、頼れる人が誰もいない子にとっては、遠く離れてしまっても、頼れる支援機関について教えてもらえるといい。
- 日中連絡が取りづらくなってしまうということも課題。アルバイトをしているときは、本当に人と連絡を取りにくくなってしまっていた。生活のリズムが夜型になってしまい、平日の昼間に連絡を取ることができない。夜中にはアルバイトが終わって連絡できるが、その時間から返信するのもはばかられ、連絡ができなくなってしまう。社会人のサポーターの方がついてくれる「自立ナビゲーション」に自分で希望して申し込んだが、時間が合わなくなり、申し訳なくなってしまった。逆に支援をしてくれる大人との距離ができてしまった。
- 直近では、住所を実親に知られたくない、ということがあった。対応として支援措置ということがあったことが分かったが、直近ではそのことを相談した。親との関係は継続的に不安等が大きい。弟がいるが、弟の対応に関して、何かと親から連絡がきてしまう。弟が嫌なわけではないが、親に会うのはストレスが大きい。そういうときに間に入ってってくれる人がいないと不安。
- 自殺対策の電話相談などがあっても、みんな電話しない。そこに電話して話を聞いてもらったところで仕方がないと思っている。こういう場で信頼関係が築けている人と相談出来たらいい。電話でなくてもチャットでもいい。
- 区役所は、大きくて入りづらい感じがする。どこの窓口に行ったらいいかも全然わからない。気軽に行ける感じがしない。また、土日は休みで相談もしていないので、働いていると行くことができない。有給休暇もなかなかとれない。
- ローンの整理など、法律関連の相談を早めにできたら良かったかもしれない。子どもの養育費が欲しいとしても、わからない部分が多い。お金のことは、友達にも相談しにくい。法テラスというのでも知らなかった。「法」という言葉がつくだけで、大事というか、1人で行くのは怖い。また、自分で探すのと人から紹介してもらうのは違う。自分で探すにも、変なところだったら怖いので探せなかった。
- 以前、マルチ商法に騙されてしまったことがある。そういうことも知っておきたかった。クーリングオフなどの制度も知らなかった。巣立ちセミナーのときに冊子をもらったが、分厚くて読もうと思えないので、困ったときに自分で調べる、というよりは、気軽に相談できて説明してもらった方がいい。

⑦ 妊娠・出産・育児について

- 子育てに関して、祖母に結構助けられてきたが、祖母も体力的にできることが限られる。子どものお父さんがいないので、誰に頼ったらいいかわからなかった。子どものことから、最初はブリッジフォースマイルの職員にも頼れなかった。子どもがどうして泣いているのかもわからない。1人で抱え込んで、誰に相談すればいいんだろうという不安が一番大きかった。養育費の取り決めはしていない。しつけについても教えてもらえるとよい。
- 子どもが病気になったときで、自分は働きに行かなければいけないときなど、急に預かってもらえる場所などを事前に知っておけるといい。
- 妊娠中も不安だった。産むか産まないかということも、事情があって友達に相談できなかった。
- 母子家庭の人がどこに相談しているんだろう、ということはすごく思う。自分のように1人で抱えている人も多いと思う。相談先の連絡先を教えてもらっても、なかなか足を運びづらい。
- シングルマザーという言葉もあまり好きじゃない。一線引かれているような壁を感じる。シングルマザーといわれるだけでも傷ついたりする。
- 身近で相談できる場所を知る機会があるといい。そこに相談すると、どういうメリットがあるか、どういう支援をしてくれるか、具体的にわかったらいいと思う。実際に自分にあった支援かどうか、わからない。シングルマザーにやさしいまち、みたいなものを聞くことがあるが、横浜市でもやってほしい。

⑧ その他

- 必要なアフターケアについて、1つには、すぐに家に帰れないなどの、一般的な家庭ではできるが、施設退所者特有の課題がある。もう1つは、施設を退所するまでに溜めてきた問題が退所するとき一気に出てくるところの課題。それ以外は、普通の人と同じサポートが欲しい。色眼鏡で見ないでほしい。特に書類関係に関して、施設出身者だから親がいない等のフィルターを1回とっばらしてほしい。

(工) 困りごとや不安が相談しやすくなるための体制

① 出身施設等との関係について

- 里親の方とは今でも関係を保っている。
- 巣立ってから5年経つ間に、1年に1回くらいは定期的に顔を合わせることができる仕組みがあったらいいのかなと思う。大人数で集まるのは嫌だ、という子もいると思う。ちょっとどこかでご飯食べようよ、みたいな形で会う機会があるといい。
- 退所後、連絡を取っていた施設の担当職員が入れ替わる際、引継ぎがあっても、自分が仕事をしながらその人と信頼関係を築くのは難しいように思う。
- 退所した後、施設での受け入れ体制が整っていることが重要。
- 出身施設でお世話になった職員の方とは、今でも月に1回くらい会っている。自分が施設に入ったときに、孤独で部屋から出られなかったりしたときに、ずっとそばで支えてくれた人。

② 退所後の支援機関等との相談について

- 「よこはま Port For」は職員の方から時々連絡をもらえる。
- 退所する際に、地域の居場所を紹介してもらい、最初だけ一緒に来てもらえるといい。登録だけする、というような形も考えられる。その後、利用するかどうかは本人次第。自分のように仲のいい人ができたりすれば、相談もできる。
- 引っ越した場合には、引っ越し先での居場所を紹介してもらいたい。もともと利用していた居場所の方が良いのであれば、Zoom等の連絡手段を残しておいてもらう、ということも考えられる。
- 市内に居場所を複数作るのであれば、児童相談所が所管するエリアごとに居場所を設置するなどということも考えられる。居場所をたくさん増やすというよりは、隣接した区の方が行けるくらいがよいのではないかな。
- 今は自立援助ホームから、たまに連絡をもらって、気にかけてもらったりしているが、施設に頼れなくなったときに、施設以外に頼れる、相談できる場所を作っていくことが大事だと思う。
- 女性の場合、妊娠したけれど、トラブルがあって、どうすればいいかわからなくなった時等に、電話でも何でもいいからサポートしてもらうことができ、今後について考えられる場所があったりするといい。お金が不足していたら、どういったところでお金が足りないのかを聞いてくれて、給付金を紹介してくれる場所があれば、すごくいいと思う。そのような専門的な相談ができる場所が複数あって、必要なときに紹介してもらえると助かる。
- 定期的に、安否確認のような連絡があると嬉しい。自分から連絡をしていなくても、施設から、どうしてる？大丈夫？みたいな連絡があると、気にかけてくれていて、相談してみようかなと思える。ブリッジフォースマイルの職員は、そのような連絡をしてくれて、助かっている。安否確認のタイミングで、困っていることはあるか、聞いてくれると、相談しやすい。

③ 相談相手との関係づくりについて

- 知っている人がいない限りは、相談したところで仕方がない。
- 相談をする際、今までのその人と築いてきた関係性によって、話せる内容が変わる。施設にいるときから、施設を卒業した後も関われる外部の大人と関わっていくことが重要。施設の中では基本的には職員としか関わらないが、退所したら施設の職員とは縁が切れてしまう。自分はフレンドホームを利用していたが、それも退所したら関係が切れてしまった。遊びに来るボランティアでも何でもいいので、退所する際に途切れない関係性が作れるといい。
- 人との関係性は、生きていれば切れていくものだと思うが、それぞれの関係性に重なっている時期があることが重要。退所時に全ての関係性が切れてしまう、という状況にならないことが必要。
- Discord や Slack など、外の人たちと交流をできる、SNS 上の仮想の地域を作れば、地域との関りを築けると思う。色々な課題が出てくると思うが、形になれば、細かい関係性がたくさんある状態を作れる。後は、自分でその糸の太さをどうしていくかの問題。それが支援者ではなく、地域として対等の関係性で存在することが大事だと思う。

4 調査結果のまとめ

(1) 「よこはま Port For」への要望等

(ア) 利用してよかったこと

- ヒアリング対象者のうち、現在「よこはま Port For」を利用している者の全てが、利用してよかったこととして、「職員と相談したり話したりできること」を挙げた。同じ境遇の仲の良い友人ができたという意見もあり、「よこはま Port For」が、社会的養護経験者に対して相談の機会を提供し、また他者との交流を行うことができる場所になっていることがわかった。
- 複数の者から、「食料品の寄付を受け取れることが助かっている」という意見が上がった。また、寄付品を定期的に送ってくれている農家の方に挨拶に行ったことがある者もあり、寄付品の受領が利用者の経済的支援に加えて、感謝の感情を醸成することに貢献している可能性が示唆された。

(イ) 施設・機能等のハード面の充実

- 面談や相談ができることを評価する声がある一方で、相談するスペースの充実を求める意見が聞かれた。社会的養護経験者への支援ニーズとして、相談先の充実を求める意見も多くあり、相談しやすい環境の整備が求められていることが示唆された。
- 1人になりたい人が1人で過ごすことができるよう、部屋数を増やすことを提案した者もいた。居場所としての利用を促すためには、利用者の多様なニーズに対応することが求められる。
- また、家や施設にいたくないときに逃げ込める場所として、宿泊できる機能を求める声も上がった。そのような場所では、食事や入浴ができる機能が必要であり、専門的なアドバイスをくれる人が必要という意見が聞かれた。
- 「よこはま Port For」への交通費や夕食費等の費用面の補助に関する要望も多く、経済的に困難な状況にある社会的養護経験者の利用を促す上で、金銭的な支援を行う必要性が示唆された。

(ウ) イベント等のソフト面の充実

- 季節ごとの催しや料理教室などのイベントがあると良いという声が聞かれた。にぎやかな場所であれば行きやすいという意見も上がった一方で、予算面での制約も厳しいとの意見も聞かれた。
- 役所に行くとき等に職員に同行を依頼する際や、相談をしたいときに事前の申請が必要なることを不便に感じている者もいた。相談することのハードルが高いと、相談自体を諦めてしまう者もいるため、緊急時に相談がしやすい体制があることが望ましいという意見があった。
- 他都市の居場所を利用している者からは、「よこはま Port For」はルールが多く、固い、静かなイメージがあり、自分とは合わないので現在は利用していない、という意見が上がった。既存の居場所事業が合わないと感じる社会的養護経験者が存在することを考慮し、他都市の居場所事業の事例等を踏まえた上で、横浜市での居場所づくりの検討を行うことが重要である。

(2) 社会的養護経験者の困りごとや不安、支援ニーズ等

(ア) 社会的擁護下の中高生にとって必要な支援等

- 児童相談所の担当職員が変わってしまうことや、児童の目から見ても施設等の職員の数が不足していること、職員の対応によっては児童の成長に対して好ましくないものがあるという意見が上がった。児童1人1人に対して決め細やかな対応を行うためには、職員の量的・質的な拡充が重要であることが示唆された。
- 施設は閉鎖された空間であるため、アルバイトや、モデルとなる大人との出会いといった経験を積むことが重要であるという指摘があった。社会的養護下の児童の成長を促す機会の充実が求められている。
- 通信機器等に関する施設の規則が厳しく、学校等で周囲から取り残される感覚を味わい、また情報活用能力の成長を制限されたという声も聞かれた。施設の規則等の検討にあたっては、そのメリットやデメリットを十分に考慮することが重要である。

(イ) 施設等を退所する際に必要な支援等

- 複数のヒアリング対象者から、経済的な理由で高等教育機関への進学を諦めたという声が聞かれた。「進学という選択肢を外していた」、「奨学金について調べることもなかった」、「施設では進学に関する情報を得ることも難しかった」という意見もあった。進学意欲のある社会的養護下の児童が経済的理由で進学を諦めることの無いよう、適切に奨学金や支援制度等の情報を提供することが重要である。
- 高校卒業後に就職した者では、「企業選びに失敗した」、「過労で倒れた」と発言する者もいた。企業選びにあたっては、児童のことをよく知る施設のスタッフからアドバイスをもらえると良いという意見や、最初の1年間は施設の担当スタッフと毎月1回くらい食事をする機会があると良いという意見が上がった。
- 住まいに関しては、複数の者から引っ越し費用の補助や、補助制度等に関する情報提供を望む声が聞かれた。また、施設退所後はひとり暮らしになる者が多く、お金のやりくりに関しては、施設で練習したものと実際とで大きく異なり、お金を使いすぎてしまったこともあった、という声も聞かれた。
- 施設を退所するときに相談先を紹介されても、その後1人で行かなければいけないのは難しいという意見があった。また、公的な手続きや区役所に行くこと自体、18歳や19歳の若者にはハードルが高いという声も聞かれた。社会的養護経験者が必要に応じて支援につながるためには、信頼できる支援者が付き添う等、そのハードルを下げるための仕組みが必要であると考えられる。

(ウ) 現在の困りごとや不安、及びそれに対する支援等

- ヒアリング対象者のうち、大学に通っている者からは、給付型奨学金を使っても卒業するまでの学費を用意することが難しいという声が聞かれた。また、高校卒業時に就職をした者で、近いうちに進学したいが時間を確保できないと述べた者もいた。高校卒業時の進学支援に加えて、修学を継続するための金銭的な支援や、一度進学を断念した者に対する進学支援も重要である。
- 就労に関する支援について、業種別のセミナー等だけでなく、職種別に必要となる技能の取得を目的とした支援を求める声が聞かれた。また、資格取得等に関する補助金については、かかった費用を後払いで受給するのではなく、費用が発生する前に金銭的な支援を受給できるよう求める声もあった。
- 転居のための保証人に困っているとの意見が聞かれた。保証人の問題にも対応でき、健康面のサポートが受けられるような、社会的養護経験者が住みやすい住まいが求められている。また、現在居住している部屋の家賃が高額であり転居したいと考えているが、転居費用を工面することが難しいとの声も聞かれた。
- 複数の対象者から心身の健康状態が悪化したら働けなくなることが不安という意見が聞かれ、中には熱が出ていてもアルバイトに行っている者もいた。いざというときに家族に頼ることができないため、健康面のサポートが必要と述べる者もいた。
- 経済的な支援に加えて、ローンの整理や養育費に関する法律関連の支援を求める声も聞かれた。法律関連の支援については、自分で調べるには不安があり、1人で相談に行くのもハードルが高いという理由から、信頼できる支援者から紹介されることが求められていた。
- ヒアリング対象者のうち、子どもを1人で育てている者からは、妊娠・出産・育児に関する支援や相談先に関する情報提供や、相談をしに行くハードルを下げることを求める声が聞かれた。

(エ) 困りごとや不安が相談しやすくなるための体制

- 出身施設の人と定期的に顔を合わせる仕組みがあったり、施設が退所者を受け入れる体制が整っていたりすると、退所後も出身施設の人と相談しやすくなるという意見が聞かれた。また、退所者が帰ることができる出身施設での定期的なイベントの開催を求める声もあった。
- ヒアリング対象者の多くが、「よこはま Port For」の職員を相談相手に挙げていた。施設等を退所する際に、地域の居場所を紹介してもらって、最初だけでも一緒に来てもらったり登録を済ませたりすることができれば、退所後もその居場所を利用しやすくなるという声が聞かれた。また、転居の際も地域の居場所の紹介があるとよいとの意見もあった。
- 信頼関係が築けていない人には相談することは難しいという声が聞かれた。定期的に安否確認のような連絡をもらえる関係性があると相談しやすいという意見もあり、相談を促すための仕組みとして、支援者が定期的にコンタクトを取り、信頼関係を築いていく必要があることが示唆された。